

# 大善寺だより

## 布施と法施



冬。日本海側や東北地方は記録的な豪雪に見舞われ、そこに暮らす住民の皆さん方は苦労が絶えない生活を送られました。一方、関東地方は長く雨が降らず、愈々水を心配する声が大きくなってきています。日本列島はどうなってしまったの。と思う今日この頃です。

冬が終わり春、桜並木で彩られる頃の寺域は一年で最高の景色を見せてくれます。てくてく歩くと各所では、お墓で汗を拭き拭き、かじかむ手を擦り擦り、草取り・掃き掃除・拭き掃除に精を出す人の清々しい姿がたくさん見られます。

寺務所に目と耳を移すと必ず、いつも欠かさずお品物をお届け下さる篤信のお檀家をはじめとして、お参りの皆さんから多種多様のお供えが届いてきます。そのお品の上にはその方の思いが乗っているので、ご本尊阿弥陀如来さまにお供えするために必ずお供え申し上げなくてははいけません。

これらをお寺では「佛供（ぶつぐ）、又は浄財（じょうざい）」と呼び、お供えしたものは「お佛飯（おぶつうまい）」と呼び、お供えしたものは「お佛飯（おぶつ

ばん）と言い換えて、その「お下がり」は月例行事参加の方々・来訪者、そして日々の事務・管理に携わる職員のほつと一息の時間へ「おすそ分け」。多種多様、仏様への想いが乗り、届けられる皆さんからの「布施」には一縷のムダはないのです。

お経から引用すると

**光明はあまねく十方の世界を照らし念仏の衆生を  
攝取して捨てたまわず**

念仏を称えて浄土を願う人を

あみださまはすべて平等にお救い下さる

このお経の文意には洩らすことなくすべてに平等の慈悲を。という解釈が含まれています。

「布施」に相對する言葉を「法施」といいます。

年回法要、諸行事、お墓等々に来た方々への目配り・気配り・和顔愛語・聞き相手。

仏さまのお話し、特にお念仏のことを広く深くお伝え（相続）申し上げること。

皆さんからお布施を戴くばかりでは申し訳ないです。

皆さんには写経会・読経会・お寺の学校・諸行事・年回忌法要・施餓鬼・お十夜。いつでもどこでも何でも色々な場面で法施を受け取ってくださいと嬉しいです。



大善寺 田邊裕誠  
合掌

## 木魚のはなし

お経をとなえるときに「ポク、ポク…」と一定のリズムを出す木の仏具「木魚」。お寺のお勤めでお馴染みのあの音。役割はテンポをそろえるメトロノームのような役割があります。そして、眠気をさまし、心を集中させる役目も担っています。

普段よく見る木魚は、丸くてコロシとした形。中は空洞で、後側に音の出口の割れ目があります。木材はカツラ、サクラ、クスなどの硬めの木。二つに割ってくり抜き、貼り合わせて作られています。叩く棒（バチ）の先に布や革を巻いて、耳に痛くない柔らかい音が出せるようになっていきます。

お経を唱えるときは僧侶同士のテンポが揃うように。そして、お念仏を称えるときは参列者の皆さんともリズムが揃い、心を落ち着かせて雑念が減るように用いています。

木魚の仲間は古くは中国の寺院で使われており、やがて東アジアに広まりました。日本にも早い時代に伝わり、鎌倉期には禅宗の影響とともに広く用いられるようになったと考えられています。いまでは各宗派で使われています。

お堂の外に大きな魚の形の板を吊るして合図に使う道具「魚板（ぎよばん）」もあり、これも魚にちなむ仲間です。

### なぜ「魚」なのか？

目を閉じない象徴・・・魚にはまぶたがないことから、昔の人は「眠らない＝油断しない」と考えました。修行中いつも目覚めている心（気づき）を大切にしてきたことから木魚はその心構えのシンボルとして用いられてきました。本体に魚や波の彫刻でデザインされているのはこうした意味を表しているのです。

木魚は「魚のように油断なく、コツコツ続ける心」を思い出させながら、みんなの声と心を一にするための道具です。当山の本堂では一緒にお念仏を勤めて頂けるよう揃えてあります。みんなと一緒に称えるお念仏が揃ったときの気持ちよさをぜひ味わって頂ければと思います。

文京区の浄心寺さま（浄土宗）には、日本一大きな木魚【高さ1.4m、幅2m、重さ500kg、叩くバチが20kg】が備えられています。時折テレビで取り上げられていますのでご覧になった方もおられるのではないのでしょうか。



テレビ番組での取材の様  
ある大きさが伝わりますでしょうか？

## ◆今後の行事予定

3月17日～23日 春季彼岸

3/20(春分の日)彼岸法要  
法話 戸田順教上人(布教師)

7月12日(日) 施餓鬼法要

### 《月例行事》

◎隔月 第3土曜 「お寺の学校」公開講座  
午後2時より講演

◎毎月 第1水曜「大善寺サロン読経会」  
午後1時  
一緒に読経 & 気軽な茶話会

◎毎月 第4土曜「写経会」  
午後1時

『般若心経』『四誓偈』  
『一枚起請文』から選べます

## 「大善寺だより」第35号

令和8年3月発行

発行人 田邊裕誠

発行所 観池山大善寺

東京都八王子市大谷町1019-1

TEL 042(642)0716

HP <https://fujimidairen.jp>



# 【おすすめブックガイド】

## 『松本清張の昭和』

（講談社現代新書）

当霊園にお墓のある松本清張氏の本格的評伝。清張の幼少期から青年期、そして国民作家として確立するまでの人生をできる限り正確な記録に基づいて描いた「初の本格的評伝」です。従来、清張については作品論や時代背景論が中心で、作家になる以前の生活史は断片的に語られるにとどまっていました。本書はその空白を埋め、極貧の家庭環境、高等小学校卒で社会に出た後の印刷工・広告意匠・新聞社勤務、さらには戦争体験までを丹念に追い、清張の小説世界と現実の人生風景との対応関係を浮かび上がらせています。

特に前半生の描写はとて苛烈で、戦前の政治体制と戦争のもと、社会の底辺で生き抜いた清張の姿は、読む者に重荷を感じさせるほどでした。しかしその苦難は、決して個人的な悲劇にとどまらず、同時代の多くの日本人が背負った体験でもあり、戦後日本が復興と発展を遂げるまでの土台を支えた世代の努力を実感させるものがあります。四十一歳で『西郷札』が入選し、遅咲きの作家として世に出た清張の歩みは、下積みの人生がいかに創作の血肉となったかを雄弁に物語っています。

全六章構成の本書は、第一章でデビュー前後に焦点を当て、第二章以降で出生の謎から印刷工時代、朝日新聞社勤務、結婚・従軍を経て国民作家へと至る道程を時系列で描いています。自伝的作品を資料として用いる点には慎重さも求められますが、本著者の筆致は冷静で、過度な美化を避けつつも清張への敬意と共感が感じられます。

また、発行部数ランキングや長者番付、納税額といった客観的・数値的データが豊富に提示され、資料的価値も高いと感じます。その一方で、本書は意図的に作品の具体的な内容や詳細な批評を控えていて、いわゆるネタバレを避ける配慮もなされています。『西郷札』や初期の長篇は人生史の中の意味として語られるにとどまり、ストーリーそのものはほとんど説明されていません。この方針は、作品論よりも人生そのものに集中するという点で有効に機能していて、読者は清張の人生を一つの物語として読み進めることができる叙述になっています。裏を返せば、当時の文壇での評価や批評に関する言及が少なくないとも言えるでしょうか。

それでも本書は、新書という体裁の中で、松本清張という国民作家の足跡を簡潔かつ要領よくまとめられていると思います。極貧から一念発起、ベストセラー作家となり、長者番付の一位に登り詰めるまでの人生は、どの作品にも勝るドラマ性を備えていると言えるのではないのでしょうか。清張ファンはもちろん総選挙の結果を目にし、改めて昭和史に関心を持つ方もいらっしゃるのでは。そうした方にも必読に値する一冊と言えるでしょう。

### 松本清張の昭和

酒井 信



松本清張の昭和 (講談社現代新書)  
2025/12/25 酒井 信 著

### 観光スポットに

八王子観光カレンダーに当山寺務所前の藤の花が採用されました。ご近所にお住まいのカメラマン中西さんの写真が使われ、4月のページを彩っています。

コンベンション協会・観光課・スーパリアルプスなど八王子の関係各所で販売・配布されました。お近くで目にされましたら4月の頁をぜひご覧下さい。



撮影 中西 隆氏



## 信長・秀吉と浄土宗

今年の大河ドラマ『豊臣兄弟!』では、秀吉の弟、豊臣秀長の視点で戦国末期の天下統一へのみちのりが描かれます。

浄土宗は、中世末期、戦国時代にはどのような状況であったのか、意外と知られていないのではないのでしょうか。



### ①戦国時代の宗教勢力と浄土宗

中世日本において仏教寺院は、単なる信仰の場ではなく、荘園や武装勢力を持つ「政治的・軍事的存在」でした。特に比叡山延暦寺(天台宗)や石山本願寺(一向宗)浄土真宗)は、多くの僧兵を擁し、戦国大名と対抗できるほどの力を持っていました。その点、浄土宗は、法然上人の教えに基づき「南無阿彌陀仏」と称え、お念仏によって阿彌陀仏に救われると説く隠遁的な教えであることが民衆に広く支持されており、天台・一向各宗のように大規模な武装勢力を持つことはなく、政治的に穏健な立場にありました。

### ②叡山焼討と浄土宗

1571年、織田信長は比叡山延暦寺を焼き討ちにしました。信長は、延暦寺が浅井・朝倉氏と結び、自らの敵対勢力を支援しているとし、叡山の勢力が政治・軍事に介入する姿勢そのものを、天下統一を目指す上で大きな障害であると断定したのです。腐敗した既得権益である伝統的権威が武力で徹底的に否定された象徴的な出来事となりました。多くの僧侶や堂塔が焼かれ、比叡山の権威は大きく失墜しました。浄土宗には、直接影響はありませんでしたが、独立し

た当初の法然上人を弾圧した旧権威の弱体化は、鎌倉新仏教各宗派が自由な活動を拡げることにつながりました。

### ③「安土宗論」と浄土宗

安土に豪壮な城を築き、城下町を新たな文化の中心とした信長は、1579年に浄厳院において公開宗教討論を開きました。関東から来ていた玉念上人に法華信者が折伏(論難)をしかけたことが発端となり、信長の前での公的な宗論に発展したのです。結果は浄土宗側の勝利と判定され、法華宗側は袈裟を剥ぎ取られ布教を禁じられる処分を受けました。信長の宗教政策に基づく一方的な鼻唄(ひいき)があったとも言われますが、井沢元彦『逆説の日本史⑩戦国霸王編』には信長公記等の記録から読み解くに、あくまでも正当な勝利であったと説明されています。宗教同士の争いが社会不安を生むことを鑑み、武力ではなく「言論によって宗派間の優劣を決める」試みとして時代の新局面を示しているのです。浄土宗の教えが正統な經典に立脚した上で、政治的にも安定的であると信長が評価したことが鍵になっています。浄土宗が非武装・穏健路線を貫いていたことを示しています。

### ④豊臣秀吉の時代と浄土宗

信長の後を継いだ豊臣秀吉も、基本的には信長の宗教政策を踏襲しました。秀吉は浄土宗寺院を安堵(保護)し、京都の総本山知恩院はこの時代に大きく発展しました。三河以来の徳川家との深い縁もあり、近世には幕府との協調路線を選択するようになっていきました。

### まとめ

織田信長・豊臣秀吉の時代における浄土宗は、叡山焼討によって示された「宗教権力の否定」と、安土宗論による「言論による宗教統制」という二つの出来事の中で、徐々にその立場を確立していきました。武装せず民衆救済を中心とする教えを維持したことで、戦国から近世へ移る時代の要請に適応し天下泰平を支持する宗派として発展していったのです。